

83才の時を迎え、振り返って思うこと

(ここに皆様の気持ちを代弁する気持ちで一筆したためました)

昭和35年即ち1960年の卒業時から、早いもので64年の時が経過した。A組、B組、C組総勢135名前後が、今日ここに集いしは僅か一割の17名である。2年前に集ったランチ会を30年以上に渡り牽引してきた泰介君、また常に出席率100%だった八重樫君や鏡君は今回は出席できる状況にないと無念の報告をいただいた。今日ここに集い来た17名は、次回今世最後の同級会まで健康に留意され、石にかじりついても参加するという決意を持ってお帰りいただきたいと思う。考えてみるに、齢83までよく生き抜いた。個々の歴史は千差万別なれど、壮絶なるあらゆる戦いに「勝利」して今日ここに集った強者である。なんとめでたきことかと共に、喜び合いたいと思う。お互いに今人生の最後を迎えるに当たって、お一人は病いにより思うようにいかないジレンマを抱えて生きる友、又お一人は奥さんに先立たれ一人悲哀の人生を歩む友、又お一人は想像を絶する大震災により全てを失っても今日ここに集いし友、涙なくして語れない人生を一人一人生き抜いてきた。なんと素晴らしいこの同級の友の姿ではあるまいか！

しかし一歩、目を外に転ずれば世界ではロシアのウクライナ侵略戦争、イスラエルとハマスの戦乱他皆正義の元に人が人を殺戮するという世界がある。悲しきかなこれもまた人間社会の現実である。本来人間は生命の尊厳を根本とし、対話による平和国家を構築する責任があるはずである。我々の人生もまた日本が太平洋戦争という真珠湾攻撃を仕掛けた昭和16年に生を受け、昭和20年敗戦を受け入れ、なんとか今日まで平和と民主的国家が誕生し戦乱に巻き込まれることなく今世の生を終えようとしている。こうした視座で自己の「生」を客観視することも、戦争の最中に生まれた我々の世代ゆえに思い起こす必要ありやと思う。しかし平均寿命の81才を越えここに集うことが出来た。お互いにあと残された数百メートルではなく数十メートルという最終コースを今走り抜き、眼前にゴールが見える今日この時である。青春の思い出を語り、お互いよりよき人生であったと、よりよき旅立ちをする予行演習とも思われる。そのような語り合いのひとつが今日この会の存在意義かもしれない。そんな思いでこの企画を練り今日に至った。次回の再来年もあつという間に訪れる85才の同級会は、今世の本当に最後の同級会になるやに思う。私も呼び掛け人の責任として先に逝く訳にはどうしてもいかないので、自己を奮い立たせてこれからも一日一日を生き抜く覚悟である。ゆえに是非皆様も自己に言い聞かせ、再度元気でこの場に集うことを誓い合う、今日の会であることを肝に銘ずる日としていただきたく思う。是非お互い努力し、85才共に迎えようではないか。

令和6年6月24日

35会企画連絡担当 佐藤 忠男